

堺市鉢ヶ峰における 1993 年から 2008 年にかけての鳥類相の変化

楠瀬雄三¹⁾・福井亘²⁾

(エコシステムリサーチ／ひとはく地域研究員¹⁾・京都府立大学大学院²⁾)

はじめに

堺市鉢ヶ峰において日本野鳥の会大阪支部が行っている探鳥会の 1993 年から 2008 年の記録から、15 年間における鳥類相の変化を調べた。

調査方法

探鳥会は、8 月および雨天を除き、毎月 1 回行われるが、参加者が毎回ほぼ同じルートを歩きながら目視観察によって出現種を記録していた。そこで本研究では、出現種の月ごとの在・不在データを解析に用いた。また、大阪府において夏鳥、冬鳥とされる種の出現傾向を基に、1 年を 5 月から 7 月の繁殖期と、11 月から 4 月の越冬期に分け、そして、5 月に始まり 4 月に終わる 1 年間を「年度」と呼ぶことにする。いっぽう土地利用の変化は、1985 年、1999 年、2007 年撮影の航空写真を用いて、調査地の中心から半径 2 km の円内を調べた。

調査結果

各年度の鳥類相を比較すると、1996 年度については、繁殖期にスズメ、ウグイス、エナガなど 14 種、越冬期にスズメ、ヒヨドリ、シロハラなど 17 種の出現頻度が、他年度の出現頻度よりも 40% 以上低かった。この年を除くと、1993 年度から 2008 年度にかけての出現頻度の変化には、繁殖期にはヤマガラ、ヤブサメ、キビタキなどの増加、ゴイサギの減少がみられた。一方、越冬期にはケリ、ジョウビタキ、ヒバリ、ミサゴの増加、エナガ、ゴイサギ、キジの減少がみられた。これらの種では、キジを除くと、年数の経過と出現頻度との間に有意な相関関係が得られた。土地利用の変化には、1985 年から 1999 年にかけて樹林や農地の減少がみられたが、1999 年から 2007 年にかけては土地利用に大きな変化はみられなかった。

考察

繁殖期および越冬期のいずれかに出現頻度が減少したゴイサギとエナガについて、堺市、大阪府、環境省のそれぞれのレッドリストを調べたところ、ゴイサギとキジが堺市レッドリストの絶滅危惧種に指定され、大阪府、環境省のそれにはしてはいていなかったため、やや広域における個体数の減少が要因となって出現頻度の低下につながったと考えられる。一方、エナガはいずれのレッドリストにも掲載されていなかったことから、局所的な個体数の減少により出現頻度が減少したと考えられる。そのほかの種の出現頻度の増加には樹林の階層構造や耕作形態、種の分布域の変化が要因として考えられる。

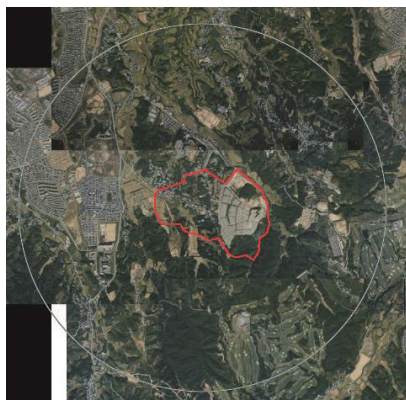


図 1 調査地。赤線は調査ルートを示す。白丸は半径 2km を示す。

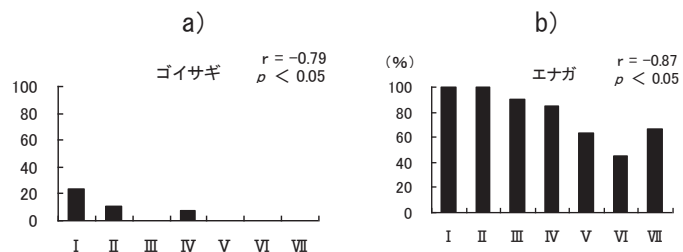


図 2. 越冬期と繁殖期における年数の経過と観察頻度の相関。a) 繁殖期 b) 越冬期。I : 1993~1995 年度, II : 1997~1998 年度, III : 1999~2000 年度, IV : 2001~2002 年度, V : 2003~2004 年度, VI : 2005~2006 年度, VII : 2007~2008 年度。